

全村避難から2015年3月で4年、帰村が始まってからほぼ3年が経過しました。出口が見えない中、心や体が締め付けられる感じは少しずつ弱まっています。ここで生活し、仕事をする喜びも感じられるようになりました。2014年3月時点での帰村者は1600人を超え、約2700人の村民の6割が戻ってきました。保育園や小学校に通う子供たちも66人となり、元気な声は私たちを励ましてくれます。

とはいえ、村は復興の途上にあります。2014年10月1日には、原発20km圏内の旧警戒区域の避難指示が解除されるとともに、旧居住制限区域から避難指示解除準備区域へと再編がありました。しかし、それによって帰村する人が急に増えたわけでもありません。

こうした4年間を通し、長崎大学の人たちの支援は復興に向けての大きな戦力でした。2013年4月には包括連携協定を締結し、継続的に支援していただける体制となりました。

### 「それほど心配するレベルではない」 高村先生の言葉で帰村を決意、宣言へ

私と長崎大学との最初の接点は、2011年10月、高村昇先生に「川内村に戻りたい。ついでには村の線量を測ってもらえないだろうか」と相談したことでした。高村先生は山下俊一先生とともに、震災直後から福島県に入られ、県の放射線健康リスク管理アドバイザーとして各地で講演会をしていました。2011年9月に原発20km圏外の避難指示が解除され、私は少しでも早く、みんなで村に戻りたいと考えましたが、安心して暮らすには、信頼できる専門家による正確なデータが欠かせません。そこである講演会の後で、高村先生に相談したのです。



高村先生は快諾され、その年の12月に長崎大の先生方と一緒に川内村に入って、村内のあちこちの土壌や食べ物の線量を測定しました。その結果、村の空間線量はかなり低いことが分かり、高村先生は「それほど心配するレベルではない」と話されました。

このひと言で帰村を決意し、2012年1月にどこよりも早く帰村宣言を行いました。電気、ガスは復旧していましたが、川内村は井戸水を使いますが、放射性物質は検出されず、日常生活に心配はありません。春になって村民は少しずつ戻ってきましたが、放射能のことはよく知りませんから、やはり不安です。その不安を和らげてくれたのが、当時まだ長崎大の大学院生だった折田真紀子先生です。空間線量のデータや土壌のデータについて、戸別訪問して一人ひとりに分かりやすい言葉で説明してくれる。13年からは村で一緒に生活していますから、それだけで安心感がぐっと増すのです。今では村の「人気者」です。

### 新しい村民を増やす努力とともに 人口減少に対応した村づくりへ

川内村は元の姿には戻りません。現在、帰村者は1600人ですが、震災前は20年後の予測でした。突然20年後の村になってしまった戸惑いがあります。加えて、若い人たちの帰村率が低く、高齢化も一気に進みました。こうした状況を考え、かつての川内村を取り戻すのではなく、未来をイメージして新たな村づくり

に取り組もうと決めました。そして復興計画を起爆剤に、5年をめどにした第四次川内村総合計画を策定しました（6ページの記事参照）。

私は次の三つが大きな柱だと考えています。まず、人口



福島県双葉郡川内村長  
遠藤雄幸氏

# 川内村を 新しく、創る

## 長崎大の蓄積を人材育成に生かしたい

2012年1月の帰村宣言から3年以上が経過した福島県川内村。村に週4日以上滞在する帰村者は村民2700人のうち1600人を超えた。とはいえ、急激な人口の減少と高齢化は、村の復興の障壁となっている。村長の遠藤雄幸氏は、10年先、20年先をイメージし、村の創造に取り組んでいる。鍵となるのは、村の未来を担う子供の教育と人材育成である。「今こそ、長崎が復興の道ので積み上げてきたものを生かしたい」と前を向く。



を増やすことです。村民に帰ってきてもらうことに加え、川内村で新しく起業する人を呼び込むことを考えています。従来の企業誘致ではなく、森林や農地など村の資源を活用して新しい事業に取り組んでくれる人が数人ずつでも増えれば、村の外から新しい風が吹き、活性化につながります。

### 子供たちは未来を見続けている 教育、人材育成に長崎大の力を

長崎大学に最も期待しているのは人材の育成です。特に子供たちの教育に、通常の授業とは違う角度から様々なわたってもらえればと思います。

村では、震災前の2005年から村営の学習塾を設置し、教育に力を入れてきました。しかし、避難先の都会のように教育環境を充実させることはできません。現在は児童・生徒数が少ないため、「個別指導」はできても多くの仲間と一緒に学ぶという経験ができません。私は「小中一貫校」を立ち上げることができないかどうか模索しています。

こうした日々の学校生活とは別に、長崎大学や長崎市との交流によって、村の子供たちは明るい未来を見ようになりました。2014年8月に長崎市に招待された子供たちは、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加し、長崎原爆資料館を見学し、さらに田上富久市長や長崎大の片峰茂学長の話を聞いてきました。原爆の被害の大きさに衝撃を受けたと同時に、その長崎が今日、ここまで復興した姿を目の当たりにして、大きな自信を持つことができました。

2013年から始まった村と長崎大学それぞれで行われた「復興子ども教室」では、川内村のよいところは何かを考え、それをアピールするなど、子供たちは自分の村の未来を見つめ続けているのだと分かりました。こうした機会を作ってくれたのも長崎大学の人たちでした。

村では、教育環境を整え、やがては世界に通用する人材として巣立ってくれることを願っています。そうならば「この人が育った川内村ってどんなところだろう」と興味を持ち、訪れる人も増えるのではないかと。私も子供たちに負けないくらい大きな夢を抱いています。

